

「つきまとい」指標作成の試み

Development of the “Following” Behavior Scale

高井 彩名

Ayana TAKAI

(日本女子大学人間社会学部心理学科 学術研究員)

要 約

近年ストーキング行為の末の殺人事件などにより、ストーカーについての世間の関心が集まっている。それに伴い、警察の効果研究を始めとして、ストーキング行為者の行動面、心理面に関する研究も増えつつある。一方で、学生相談の現場でも無視できない問題であるが、その研究は少ない。

本研究では、青年期の「つきまとい」行動についてその実態を理解するために、「つきまとい」指標を作成することを目的とした。なお、警察等による、ストーキング行為者と対象者の関係性に関する統計を考慮し、実際の交流がない場合 (pre-partner) と、交流、あるいは交際があった場合 (ex-partner) とに分けて、指標を作成した。

記述式調査の結果を元に、項目を作成し、因子分析や項目内容の検討、および妥当性の検討を経て、最終的に pre-partner 「つきまとい」指標 20 項目、ex-partner 「つきまとい」指標 20 項目を抽出した。

[Abstract]

Stalking has recently been considered as a major problem both of student counseling settings and of society in general.

In the present study, we regarded the stalking behavior seen in student counseling as “following” behavior, therefore developed the “following” behavior scale for analyzing “followers”. The most of articles mentioned relationship between the stalkers and the subjects brought us to suppose two situations, pre-partner and ex-partner. We defined pre-partner under the situation of the “follower” by general affection, and ex-partner under that of the “follower” by love affairs and broke-up.

A survey was conducted on university and graduate students three times. According to factor analysis results, “following” behavior scales both of pre-partner and ex-partner consists of three factors; “satisfying his/her wants on one’s own”, “behavior to approach”, “adhesive behavior to approach”, and also confirmed its reliability and validity.

問題と目的

桶川ストーカー殺人事件を契機とし、日本では2000年にストーカー規制法が制定された。警視庁の発表している統計からもわかるように、年々ストーキングの認知件数は増加しており(警視庁, 2013)、世間の注目が集まるとともに、メディアにおいて殺人等の犯罪事例化したケースが大々的に報道されたり、ストーカーの特集を目にしたたりすることも多くなった。このストーキング被害の深刻化から、警視庁は、ストーカーの「危険度判定チェックリスト」を精神科医と連

携して作成し、全国の警察本部に導入する方針を固めたことが報じられている(毎日新聞, 2013)。また警察庁において、専門家による、加害者へのカウンセリングや治療を実施する等の調査研究が行なわれているとされ(櫻井, 2014)、事例化するような重大なストーキングに対するアプローチは増加していると考えられる。

世間一般においてストーキング問題は関心を集めているが、学生相談の場においても、この問題は無視できないものとなっている。実際、学生相談の現場に従事していても、そういった問題についての相談は少なくない。宮村(2005)の調査でも、女子大学生の約4割、男子大学生の約1割がストーキング被害を受けたことがあるという結果が得られており、特に女子大学生にとっては他人事ではすまされない大きな問題といえる。また、宮村は様々な原因からなるストーキング被害においては、原因に応じて対策を分けて講じる必要があるとも述べている(宮村, 2005)。

原因に応じて対策を講じるにはまず、ストーキング行為者についてよく知ることが必要となるが、学生相談の現場等で重要となる、青年期のストーキング行動に焦点をあてた研究は少ない。そこで本研究では、まず青年期のストーキング行動はどのようなものかを測定する、「つきまとい」指標を作成することを目的とした。なお、調査に際しては、高井(2015)の調査と同じく、青年期のストーキング行為を「つきまとい行為」と表現することとした。

ところで、日本では、福島(1999)、福井(2014)などにより、ストーカーは精神病理面や対象者との関係性から様々な分類もされている。

海外でも、多くの統計的な研究がなされているが、Mullen (1999)によれば、ストーキングの見立てについては様々な情報が必要であるが、中でも、ストーキング行為者と対象者間の関係は、もっとも重要な情報だとされている。微に入り細を穿てば、ケースによって差異があるだろうが、ストーキング行為者と対象者間に、実際の交流があったか否かという点が1つの大きな分かれ目であると考えられるからである。福島(1999)によれば、もともと関係のあった相手を対象者とするタイプが最も我々に身近であるとされており、実際に警視庁の統計においても、最も多く認知されているのは、元パートナーによるストーキングである(警視庁, 2014)。これらのことから、ストーキング行為者と対象者間に実際に接触がなかった場合と、接触、あるいは交際関係等があった場合は、行動レベルでも心理的側面でも区別して検討するべきと考え、指標も2通り作成することとした。

方法

調査①

以前行った面接調査で得られた情報を加味しながら、本調査で使用する「つきまとい」指標の項目を作成するため、質問紙調査を行なった。

(1) 調査時期

2010年7月下旬から9月上旬に行った。

(2) 調査対象者

首都圏内の女子大学に在籍する大学院生の女性20名、および同女子大学の大学生女性17名、心理相談室助手女性3名(計40名)を対象とした。対象者の年齢は、19歳から38歳であった。

(3) 調査方法

自由記述と評定尺度法を用いた質問紙調査を行なった。質問紙配布については、上記時期において、研究者が直接配布、回収を行なった。

なお、表紙において、協力者のプライバシー保護や分析上の倫理的配慮などを明記し、了承した協力者にのみ回答してもらった。

(4) 調査内容

質問項目は、①「つきまとい」という言葉を聞いてイメージする行動、②その行動を実際された時の許容度、③「つきまとい」を行う人の気持ち、④「つきまとい」と「ストーカー」は同義か否か、⑤ ④で否と答えた場合、両者にはどのような違いがあるか。

この中で、②は「1 まったく問題ない」から「6 まったく許容できない」の6件法による評定尺度法を、④においては「同じ・違う」の2件法による評定尺度法をとった。その他は自由記述であった。

(5) 結果の整理

上記の質問項目のうち、本論文では「つきまとい」指標作成に焦点をあてるため、質問項目①について取り上げる。

調査結果①

各協力者で回答された項目数は個人差があったが、全協力者が3項目以上回答しており、重複していたものを除いて、全部で86項目が得られた。

最も多かったのは「後ろからついていく」で、22名が回答していた。それに続き、「しつこく電話を掛ける」(9名)、「家の近くに来る」(8名)、「追いかける」(7名)、「常に見ている(じっと見つめる)」(6名)という回答が多かった。

得られた回答の中から、研究者と臨床心理専門家1名とで、表現の差異のみで内容が同じ項目の削除、および「陰湿」という回答のような、指標として使用できない項目の削除を行い、その結果、回答数の多かった項目を中心とした、39項目が抽出された。

調査②

調査①の調査結果で抽出された39項目を、「つきまとい」指標とし、この「つきまとい」指標の信頼性と妥当性を調査するため、質問紙調査を行った。なお、事前の面接調査等からの聞き取り内容や仮説を加味し、①好きな相手に振られた後(pre-partner)、②付き合っていた相手に振られた後(ex-partner)と2つの状況を想定してもらい、それぞれ回答してもらうこととした。

(1) 調査時期

2010年10月中旬に行った。

(2) 調査対象者

首都圏内女子大学の心理学科に所属する大学生および大学院生の女性110名を対象とした。

(3) 調査方法

評定尺度法による質問紙を用いた。質問紙配布については、上記時期において、授業内等にて

研究者が直接配布、回収を行なった。

なお、表紙において、協力者のプライバシー保護や分析上の倫理的配慮などを明記し、了承した協力者にのみ回答してもらった。

(4)調査内容

調査①の結果を元に作成した「つきまとい」指標を用いた。指標には、①好きな相手に振られた後(以下 pre-partner)、②付き合っていた相手に振られた後(以下 ex-partner)と2つの状況を想定してもらい、それぞれ6件法を用いて回答してもらった。①pre-partnerの場合の状況設定は「あなたはとても好きな人がいて、告白をしました但振られてしまいました。しかし、あなたはまだ相手のことが好きであきらめられません。」というものに、②ex-partnerの場合の状況設定は「あなたは実際に付き合っていた相手に振られてしまいました。しかし、あなたはまだ相手のことが好きであきらめられません。ですが、相手にあなたとよりを戻す気はないようです。」とした。

「つきまとい」指標の項目は①pre-partnerは38項目、②ex-partnerは39項目だった。なお、pre-partnerの項目数がex-partnerの項目数より1つ少ないことについては、「合鍵で相手の家に入り、待つ」という項目がないためである。これについては、対象者が元交際相手の場合には、対象者の家の合鍵をつきまとい行為者が持っていたとしても不思議ではないが、交際関係になかったにも関わらず、つきまとい行為者が対象者の合鍵を持っている状況はあまり想定されないという理由で削除した。

また、教示文においては、調査協力者の社会的望ましさを最低限に抑えるために、「このような状況に置かれた時、次のような行動をしてしまう気持ちかどの程度わかりますか。(実際にあなたがするかどうかではありません。)」とし、行為を実際にしたことがあるか否かではなく、してしまう気持ちへの共感の有無を回答してもらうことにした。

調査結果②

質問紙の回収率は100%であったが、本研究は青年期を対象とした調査のため、18歳から26歳までのデータを使用することにした。平均年齢は20.5歳であった。

年齢の問題、欠損値を除外し、最終的に104名のデータを分析に使用することにした。

(1)pre-partner「つきまとい」指標

全38項目から、フロア効果が見られた13項目を削除した後、残り25項目について因子分析(最尤法・Promax回転)を行った。因子負荷量が.45以下であった7項目を削除し、再度分析を行い、最終的に2因子19項目を抽出した(Table1-1)。

次にこの尺度の信頼性係数を算出した。1項目により、信頼性係数が低下していたため、その項目を削除した。最終的に、Pre-partner「つきまとい」指標は18項目となった。

Table1-1 pre-partner 「つきまとい」指標 因子分析（最尤法・Promax 回転）

| | 1 | 2 |
|---------------------------|------|------|
| 33, 相手の日程や行動パターンを調べる。 | .89 | .16 |
| 36, 相手のことを詳しく調べる。 | .83 | .04 |
| 27, インターネットで相手の名前を検索してみる。 | .74 | .30 |
| 21, 相手の交友関係を把握する。 | .74 | .04 |
| 37, 相手の予定を把握する。 | .72 | .06 |
| 32, 相手との恋愛を妄想する。 | .70 | .02 |
| 35, 相手が「今何しているか」を気にする。 | .64 | .04 |
| 14, 相手の写真や写メを撮って持っている。 | .57 | .01 |
| 31, 相手をかなり頻繁にほめる。 | .53 | .30 |
| 30, 常に相手の視界に入るようにする。 | .52 | .31 |
| 11, 相手を常に見ている, あるいは見ていたい。 | .52 | .10 |
| 3, 相手が好きなものを持つ。 | .52 | .23 |
| 4, 相手の行動を観察する。 | .50 | .09 |
| 24, 相手に手紙を送る。 | .49 | .07 |
| 2, 相手の後ろからついていく。 | .48 | .04 |
| 5, 何度も話しかける。 | -.02 | .77 |
| 9, 何度もメールする。 | .02 | .75 |
| 1, 相手に何度もアタック（アプローチ）する。 | .11 | .72 |
| 16, 相手に一切近づかない。 | .08 | .41 |
| 因子相関行列 | 1 | 2 |
| 1 | 1.00 | .47 |
| 2 | .47 | 1.00 |

（「16, 相手に一切近づかない」は信頼性係数を上げるために削除した。）

(2)ex-partner 「つきまとい」指標

ex-partner 「つきまとい」指標についても同様に、フロア効果の見られた16項目を削除した後、残り23項目について因子分析（最尤法・Promax回転）を行った。

因子負荷量が.45以下であった1項目を削除し、再度分析を行い、最終的に2因子22項目を抽出した（Table1-2）。

次に、この尺度の信頼性係数を算出した。2項目により、信頼性係数の低下が見られたため、その項目を削除することにした。最終的にex-partner 「つきまとい」指標は20項目が残ることとなった。

Table1-2 ex-partner つきまとい指標因子分析（最尤法・Promax 回転）

| | 1 | 2 |
|------------------------------------|-----|------|
| 36. 相手のことをさらに詳しく調べる。 | .84 | .14 |
| 32. 相手との恋愛を妄想する。 | .78 | .30 |
| 27. インターネットで相手の名前を検索してみる。 | .77 | .43 |
| 21. 相手の交友関係を把握する。 | .68 | .14 |
| 37. 相手の予定を把握する。 | .66 | .20 |
| 11. 相手を常に見ている、あるいは見ていたい気持ちがある。 | .65 | .12 |
| 33. 現在把握している以上に相手の日程や行動パターンを調べる。 | .65 | .04 |
| 35. 相手が「今何しているか」を気にする。 | .65 | .03 |
| 30. 常に相手の視界に入るようにする。 | .64 | .01 |
| 19. 相手の mixi、ブログやツイッターをこまめにチェックする。 | .64 | .06 |
| 14. 相手の写真や写メを撮って持っている。 | .59 | .06 |
| 26. 相手本人だけでなく、その友達にも話しかける。 | .58 | .08 |
| 4. 相手の行動を観察する。 | .56 | .23 |
| 22. 相手の態度を気にせず馴れ馴れしく接する。 | .54 | .15 |
| 39. 相手をかなり頻繁にほめる。 | .53 | .17 |
| 15. 相手に触る。 | .50 | .18 |
| 9. 何度もメールする。 | .17 | .74 |
| 5. 何度も話しかける。 | .21 | .70 |
| 10. 何度も電話をかける。 | .22 | .63 |
| 16. 相手に一切近づかない。 | .37 | -.62 |
| 28. 相手とすれ違うとき、わざと知らない振りをする。 | .27 | -.62 |
| 1. 相手に何度もアタック（アプローチ）する。 | .22 | .49 |
| 因子相関行列 | 1 | 2 |
| | 1 | 1.00 |
| | 2 | .59 |
| | | 1.00 |

（「16, 相手に一切近づかない」と「28, 相手とすれ違うとき、わざと知らない振りをする」は信頼性係数を上げるために削除した。）

(3)項目追加

上記のように因子分析の結果、項目がそれぞれ抽出されたが、この予備調査は、女性のみを対象としたものであり、母集団に偏りがあったと考えた。そのため、研究者の他、同大学院の院生2名と共に、削除された項目の中から、研究の目的を配慮し、母集団を拡大することで受け入れられるだろうと考えられる項目を吟味し、pre-partner「つきまとい」指標は3項目、ex-partner「つきまとい」指標は4項目を追加することにした。

追加した項目は、pre-partner「つきまとい」指標では「何度も電話をかける」、「相手の家の近くまで行く」、「相手の携帯電話の留守電にメッセージを入れる」であり、ex-partner「つきまとい」指標では、「相手の家の前で待ち伏せをする」、「相手にプレゼントを贈る」、「相手の家の近くまで行く」、「相手の携帯電話の留守電にメッセージを入れる」であった。

調査③

(1)調査時期

2010年10月下旬から11月上旬にかけて行った。

(2)調査対象

首都圏の大学生および大学院生の男性、女性800名を対象とした。

(3)調査方法

評定尺度法による質問紙を用いた。質問紙配布については、上記時期において、研究者が直接配布、回収を行なったり、授業を受け持つ教授に依頼し、授業中に配布、回収を行ってもらったりした。

なお、表紙において、協力者のプライバシー保護や分析上の倫理的配慮などを明記し、了承した協力者にのみ回答してもらった。

(4)調査内容

質問紙は①下田式性格検査(SPI)、②“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度、③成人用ソーシャルスキル自己評定尺度、④「つきまとい」指標の4尺度から構成されていた。

なお、「つきまとい」指標については、①pre-partnerは21項目、②ex-partnerは24項目で、教示は予備調査時と同様のものを用い、「1、まったくわからない」から「6、非常によくわかる」までの6件法を用いて、評定してもらった。

結果

本研究では、調査で得られたデータのうち、④「つきまとい」指標についてのみ述べる。

質問紙は631名より回収でき、回収率は約79%であった。なお、分析においては、各尺度の全項目に回答していた527名(男性282名、女性245名、平均年齢20.2歳)を分析対象とした。

(1)pre-partner「つきまとい」指標

pre-partner「つきまとい」指標について、因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行い、最終的に3因子20項目が抽出された(Table2-1)。信頼性係数は $\alpha = .91$ であり、一定の内的整合性が得られた。

なお、この指標は本研究におけるオリジナルのものであったため、それぞれの因子に名前をつけることにした。

Table2-1 Pre-partner 「つきまとい」指標因子分析（最尤法・Promax 回転）

| | 因子負荷量 | | | |
|----------------------------------|--------|-------|-------|------|
| | 1 | 2 | 3 | |
| 18. 相手の日程や行動パターンを調べる。 | 0.85 | -0.21 | 0.13 | |
| 20. 相手のことを詳しく調べる。 | 0.82 | -0.05 | 0.06 | |
| 21. 相手の予定を把握する。 | 0.78 | -0.15 | 0.18 | |
| 10. 相手の交友関係を把握する。 | 0.70 | 0.07 | -0.03 | |
| 19. 相手が「今何しているか」を気にする。 | 0.65 | 0.16 | -0.13 | |
| 7. 相手を常に見ている, あるいは常に見ていたい気持ちがある。 | 0.61 | 0.32 | -0.24 | |
| 4. 相手の行動を観察する。 | 0.61 | 0.19 | -0.16 | |
| 17. 相手との恋愛を妄想する。 | 0.6. | 0.19 | -0.07 | |
| 14. インターネットで相手の名前を検索してみる。 | 0.54 | -0.08 | 0.17 | |
| 9. 相手の写真や写メを撮って持っている。 | 0.52 | 0.00 | 0.15 | |
| 15. 常に相手の視界に入るようにする。 | 0.51 | 0.16 | 0.00 | |
| 16. 相手をかなり頻繁にほめる。 | 0.45 | 0.25 | 0.01 | |
| 3. 相手が好きなものを持つ。 | 0.41 | 0.16 | 0.09 | |
| 5. 何度も話しかける。 | -0.01 | 0.76 | 0.10 | |
| 13. 何度もメールする。 | 0.00 | 0.58 | 0.26 | |
| 1. 相手に何度もアタック（アプローチ）する。 | 0.09 | 0.50 | 0.09 | |
| 12. 相手の携帯電話の留守電にメッセージを入れる。 | -0.07 | 0.08 | 0.81 | |
| 11. 相手に手紙を送る。 | -0.07 | 0.30 | 0.59 | |
| 8. 相手の家の近くまで行く。 | 0.4 | -0.06 | 0.42 | |
| 2. 相手の後ろからついていく。 | 0.28 | 0.07 | 0.37 | |
| | 因子相関行列 | 1 | 2 | 3 |
| | 1 | 1.00 | 0.54 | 0.47 |
| | 2 | 0.54 | 1.00 | 0.28 |
| | 3 | 0.47 | 0.28 | 1.00 |

①第1因子

第1因子は13項目から構成されていた。内容は、「相手を常に見ている, あるいは常に見ていたい気持ちがある」、「相手のことを詳しく調べる」などの「相手を知りたい」という気持ち, 行動を表す項目が主であった。だが一方で、「相手との恋愛を妄想する」, 「常に相手の視界に入るようにする」, さらに「相手をかなり頻繁にほめる」というような自己満足を満たすような項目も見られた。いずれの項目も, 相手を知りたい気持ちや相手と親しくなりたい気持ちが根本にあるようだが, 想うだけであり, それに対して相手からの反応を求めている。自分の中で欲求を満たし, それで満足を得ていることから, 因子名は“自己内欲求満足”と名付けた。

②第2因子

第2因子は3項目から構成されていた。内容は、「何度も話しかける」、「何度もメールする」、「何度もアタック(アプローチ)する」であった。どの項目も相手へあきらめることなく働きかけるという内容で、行為者の「執拗さ」を感じさせるものであった。よって、因子名は“粘着的接近行動”と名付けた。

③第3因子

第3因子は4項目から構成されていた。内容は、「相手の携帯電話の留守電にメッセージを入れる」、「相手の家の近くまで行く」などで、全体的に相手への積極的な働きかけの項目が集まっていた。しかしながら、これらの行動には、どの程度の頻度でされるものなのか、という内容は含まれていない。一度だけであれば、誰もが実行してしまう可能性のある行動であり、そう考えるとややマイルドなものが集まっていると言える。よって因子名は“接近行動”と名付けた。

なお、指標全体の信頼性係数は、 $\alpha = .91$ で、第1因子“自己内欲求満足”指標では、 $\alpha = .91$ 、第2因子“粘着的接近行動”指標では、 $\alpha = .80$ 、第3因子“接近行動”指標では、 $\alpha = .74$ であり、一定の内的整合性が得られた。

(2) ex-partner 「つきまとい」指標

Pre-partner 「つきまとい」指標と同様に、ex-partner 「つきまとい」指標についても因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行い、最終的に3因子20項目を抽出した(Table2-2)。

尺度全体の信頼性係数は $\alpha = .95$ であり、高い内的整合性が得られた。

Table2-2 Ex-partner 「つきまとい」指標因子分析(最尤法・Promax 回転)

| | 因子負荷量 | | |
|-------------------------------------|-------|------|------|
| | 1 | 2 | 3 |
| 8. 相手を常に見ている、あるいは常に見ていたい気持ちがある。 | .93 | -.03 | -.16 |
| 21. 相手が「今何しているか」を気にする。 | .75 | -.02 | .04 |
| 12. 相手の mixi, ブログやツイッターをこまめにチェックする。 | .72 | .05 | -.05 |
| 2. 相手の行動を観察する。 | .68 | .09 | -.01 |
| 13. 相手の交友関係を把握する。 | .68 | -.02 | .21 |
| 19. 相手との恋愛を妄想する。 | .64 | .01 | .09 |
| 10. 相手の写真や写メを撮って持っている。 | .56 | .05 | .14 |
| 18. 常に相手の視界に入るようにする。 | .50 | .13 | .11 |
| 24. 相手をかなり頻繁にほめる。 | .44 | .17 | .07 |
| 6. 何度もメールする。 | .07 | .83 | -.04 |
| 7. 何度も電話をかける。 | -.14 | .83 | .20 |
| 1. 相手に何度もアタック(アプローチ)する。 | .24 | .64 | -.12 |
| 3. 何度も話しかける。 | .30 | .62 | -.08 |

| | | | | |
|----------------------------------|--------|------|------|------|
| 5. 相手にプレゼントを贈る。 | .00 | .41 | .23 | |
| 20. 現在把握している以上に相手の日程や行動パターンを調べる。 | .11 | -.09 | .86 | |
| 22. 相手のことをさらに詳しく調べる。 | .18 | -.17 | .84 | |
| 4. 相手の家の前で待ち伏せする。 | -.15 | .29 | .57 | |
| 9. 相手の家の近くまで行く。 | .10 | .13 | .52 | |
| 15. 相手の携帯電話の留守電にメッセージを入れる。 | -.22 | .34 | .51 | |
| 23. 相手の予定を把握する。 | .40 | .01 | .48 | |
| | 因子相関行列 | 1 | 2 | 3 |
| | 1 | 1.00 | .60 | .67 |
| | 2 | .60 | 1.00 | .55 |
| | 3 | .67 | .55 | 1.00 |

①第1因子

第1因子は9項目から構成されていた。内容は、「相手を常に見ている、あるいは見ていたい気持ちがある」、「相手のmixi、ブログやツイッターをこまめにチェックする」などの「まだ相手のことを知ってほしい」という気持ちがあり、消極的ながらも相手のことを諦めずに把握し続けようとする行動を表す項目が主であったが、同時に「常に相手の視界に入るようにする」、「相手の写真や写メを撮って持っている」などの自己満足を満たすような項目も見られた。内容としては、pre-partnerの因子分析結果における第1因子の項目内容とほとんど変わらない。よって、因子名はpre-partnerの第1因子と同様の“自己内欲求満足”とした。

②第2因子

第2因子は「何度もメールする」、「何度も電話する」などの5項目から構成されていた。内容としては、pre-partnerの第2因子と同じようなものが集まっていたが、以前の際際相手ということで、「相手にプレゼントを贈る」のような、一歩踏み込んだ働きかけがあるとわかる。項目の構成内容としては、pre-partnerの第2因子と概ね同様であったため、因子名は“粘着的接近行動”とした。

なお、pre-partner「つきまとい」指標では第2因子、第3因子の中間的項目であったために削除した、「何度も電話をかける」という項目は、ex-partnerでは、第2因子と第3因子両方の因子負荷量が高いということはなく、第2因子に属しているものとわかった。

③第3因子

最後に第3因子だが、構成は「現在把握している以上に相手の日程や行動パターンを調べる」、「相手のことをさらに詳しく調べる」、「相手の家の前で待ち伏せする」などの6項目から成っていた。内容は、pre-partnerの因子分析における第3因子とほぼ同じものであるとわかる。よって、因子名はpre-partnerの第3因子同様、“接近行動”とした。

なお、この指標全体の信頼性係数は、 $\alpha = .95$ で、第1因子“自己内欲求満足”指標では、 $\alpha = .91$ 、第2因子“粘着的接近行動”指標では、 $\alpha = .86$ 、第3因子“接近行動”指標では、 $\alpha = .87$ であり、高い内的整合性が得られた。

なお、pre-partner「つきまとい」指標、ex-partner「つきまとい」指標共に、男女別にも因子分析してみたが、因子構造が概ね同じだったため、男女間での因子構造の差はないと判断した。

考察

(1)「つきまとい指標」内容における「つきまとい行為」について

記述式質問紙の結果を元に作成した「つきまとい」指標から、最終的に削除された項目の内容は、「相手の捨てた紙ごみをあさる(あさりたい欲求がある)」、「無言電話をかける」、「合鍵で相手の家に入り、待つ(ex-partnerのみ)」などの、好意を表す行動としても、行き過ぎている行動や、「相手が不快になるようなことをする・言う」、「相手を恐がらせるようなことを言う」などの相手に対するネガティブな働きかけのものであった。

これらの行動はストーカー規制法が適用される範囲の行動と思われる。一般にストーカー行為と定義されているような内容が除外されたと考え、**「つきまとい」と「ストーカー」との間には、行動のレベルでも違いがある可能性があると考えられる。**これは、高井(2015)の調査結果の、「つきまといとストーカーの違い」における、「ストーカー」は行為対象者の生活に支障が出るレベルのもので、「つきまとい」はそれ未満であるという、「危険度の分類」と一致していると考えられる。このことから、青年期の学生たちにとって、「つきまとい行為」は、「ストーキング行為」よりもややマイルドなものとして考えている可能性が考えられる。

一方で、「何度もメールする」「何度も電話をかける」等、「何度も」という言葉が入った項目は何項目か残ることとなった。現行のストーカー規制法においては、『つきまとい行為』を反復継続する場合は、その行為自体を犯罪としており(後藤, 2014)、上記項目はこれに該当するところと考えられる。このことからすると、青年期の「つきまとい行為」においても、一部は成人期以降の「ストーキング行為」と重複するところもあるということになる。

以上のことから、青年期の「つきまとい行為」と成人期の「ストーキング行為」は、異なるところもあれば、重複するところもあり、その境界については今後更なる検討が必要と考えられる。

(2)「つきまとい」指標の因子について

Pre-partner、ex-partnerともに、“自己内欲求満足”、“接近行動”、“粘着的接近行動”の3因子が抽出されることとなった。

高井(2015)は、「つきまとい」行動に伴う気持ち等について、「好意」、「接近欲求」、「行動化」、「要求・期待」、「逸脱した感情・思考」、「習慣性」の6つのカテゴリーを抽出し、それについて考察しているが、本研究の“自己内欲求満足”は「好意」、「接近欲求」に、“接近行動”、“粘着的接近行動”は「行動化」にあたるといえる。“自己内欲求満足”は対象者への好意を動機とした、相手の行動や状況を把握したいという欲求だが、その行動は比較的、対象者に気づかれにくいものも多い。一方で、“接近行動”や“粘着的接近行動”は対象者への直接的な行動であり、対象者からも「つきまとい」行動として認知されやすいといえる。特に“粘着的接近行動”は「何度も」行われることを特徴とするため、対象者も恐怖を感じやすい可能性があり、恐怖を感じる行為が相手への拒絶につながることもあるだろう。宮下(1998)に指摘されている青年期の感情体験の大きさを考えると、行為者への拒絶が原因で、対象者へのネガティブな感情に発展しやすくなる可能

性が考えられる。

ところで、“接近行動”と“粘着的接近行動”を並べてみると、「粘着的」という部分以外に違いがなく、類似した行動のように感じられる。だが、因子負荷量を比較してみると、“接近行動”の項目は“粘着的接近行動”因子には負荷量が少なく、また、“粘着的接近行動”の項目についても同様のことが言える。よって、この2つの行動は質が異なる可能性があると考えられる。

この2つの違いは、“粘着的接近行動”の項目にある「何度も」という言葉に最も表れている。“接近行動”の項目においては、行動の内容自体は好ましいとは言えないが、「頻繁さ」の要素はない。一方“粘着的接近行動”に関しては、「頻繁さ」が全面に押し出されている。(1)でも述べたが、ストーカー規制法の施行対象となる行為でもある。この「頻繁さ」、いわゆる「しつこさ」が加わることで、ただの“接近行動”とは行動の質が異なってくると考えられる。研究者は、“接近行動”においては、健常群でも了解可能な場合が多いが、“粘着的接近行動”では、“接近行動”に比べて了解しがたくなり、かつ、何らかの逸脱を伴うと推測している。“接近行動”は不器用さによるものだが、“粘着的接近行動”ではどちらかというところ、強迫性、あるいは執念深さによるものだと考えているためである。前述の高井(2015)の「つきまとい」行動のカテゴリーの内、行為の「習慣性」と関係あるとも考察できる。また、福井(2014)は自身の著書の中で、ストーカー規制法に抵触するレベルの行為者を「ストーカー病」と名付けており、「ストーカー病」の人間は、自身の思い込みにより、何度も対象者に接近することをやめられないとしているが、本研究結果における“粘着的接近行動”も、類似のものであると考えることもできる。その場合、「つきまとい行為」の中でも“粘着的接近行動”の指標の高さが、成人期以降のストーカーと類似の特性を持っていることの示唆になり得る可能性があるだろう。今後、“接近行動”と“粘着的接近行動”の違いが「つきまとい」行為者の心理面でどのように異なるのか、さらなる考察を重ねて行く必要があると思われる。

(3)pre-partner と ex-partner の違いについて

本研究では、交際していない相手に振られた場合を想定する pre-partner の場合と、交際関係があり、一方的に相手に振られた場合の ex-partner の場合に分けて、「つきまとい」指標を作成した。

最初に用意した項目においては、ex-partner の「合鍵で相手の家に入り、待つ。」を除き、全て同じ項目を用意したが、フロア効果、および因子分析(因子負荷量による)の除外によって削除された項目が一部異なっており、pre-partner では除外されなかった項目が、ex-partner の方ではフロア効果により除外されていたものがあつた。

このことから、健常群では pre-partner に対する「つきまとい」よりも、ex-partner に対するそれの方が許容できない、あるいは了解不可能なのではないかと考えられる。ex-partner の場合の指標の得点において、この了解不可能と思われる項目の得点が高いものだった場合、それは健常群の中でも、何らかの特質を持っている可能性が示唆されると思われ、状況によっては、「つきまとい行為」の危険度の指標となる可能性がある。

結果でも述べたが、院生2名と共に、フロア効果で除外された項目から、何項目か追加したのはそのためである。Pre-partner と ex-partner の「つきまとい」における、行動、および心理面の差異については、引き続き検討が必要だろう。

今後の課題

本研究においては「つきまとい」指標を作成し、内的整合性は得られることとなったが、「つきまとい」行動についての研究はまだまだ少なく、本来の尺度作成で検討すべきである。基準関連妥当性の検討については行えなかった。今後類似領域である、ストーカーおよびストーキング行為の研究も視野に入れながら、類似尺度との関連性、および本指標の妥当性を精査していく必要があると考えられる。十分な検討の元、大学を始めとする青年期の男女の在籍する現場での実用を視野に、さらなる調査をすすめていくことが肝要である。

引用文献

- 福島章 1999 ストーカーの心理 刑政109巻第1号 刑務協会.
- 後藤弘子 2014 ストーカー行為に対する警察の対応とその問題点. 犯罪と非行, (178),18-39.
- 警視庁ホームページ 2013 ストーカー事案の概況.
- 毎日新聞 4/19, 2013 朝刊.
- 宮村季浩 2005 大学生における恋愛関係の解消とストーカーによる被害の関係. 学生相談研究, 26(2), 115-124.
- 櫻井美香 2014 ストーカー犯罪と対策. 犯罪と非行, (178), 40-50.
- 高井彩名 2015 女子学生の考える「つきまとい」行動について. 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 (21), 85-94.
- Theriot, M. T. 2008 Conceptual and Methodological Considerations for Assessment and Prevention of Adolescent Dating Violence and Stalking at School. *Children and Schools*, 30(4), 223-233.